明石の史跡（８５）播州二見の蛸

年が改まると、いささか旧聞の部類に属するかもしれないけれども、平成１８年（２００６）９月２６日（火）付の『朝日新聞』の朝刊によれば、市内硯町のマンション建設予定地内の工事現場（ＪＲ明石駅の西約１．５キロ）から、その数２００個以上のイイダコ壷の出土（８世紀頃の地層）が報じられていた。２００個を越える数量は、これまでの市内の遺跡からは、見られなかったという。しかも未使用であって、形状（高さ約１５ｃｍ、直径約７ｃｍ）は最近まで使用されていたイイダコ壷と、ほぼ同型。現場はおそらく生産地か、保管に関する設備の存在が、指摘されているのは、首肯できよう。

近世の記録（『重修本草綱目啓蒙』３０）によれば、京師（京都）の市場に到来する蛸（イイダコ）は、すべて播州二見浦で獲れたもので、兵庫（神戸市）を中継して、送られたという（『古事類苑動物部』１５４９頁）。当時の京都市民からすれば、商店の棚に並べられた蛸は、すべて二見の蛸であって、ある種ブランド的要素をもったのかも知れない。

漁獲法は、長縄に長瓦壷（たこつぼ）のなかに、紅帛片（もみのきれ）または、熟した番椒（とうがらし＝唐辛子）を入れたものを、数個連綴して、海底に沈めたときは、必ず蛸壷に入るという。陸に引き上げてもなかなか出てこない。そこで壷の底をツメで掻くと、皆走り出て捕獲されることが紹介されている（同書１５４９頁）。

『大和本草１３』は、但馬の大蛸を、『日本山海名産図会四』には、牛馬をも食らうという滑川（越中富山）のものなど、日本海方面における大蛸の存在が、記録されている（同書１５４９－５１頁）。穏やかな瀬戸内とは、対照的な話でもある。

日本歴史学会会員　　茨木　一成

硯町遺跡蛸壷